

終末へのカウントダウン

mikeneko3224

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2017年4月1日

太平洋にて某国による水爆実験が行われた。国連は某国に対して厳しい批判を浴びせ、経済制裁にまで踏み切った。

4月17日

国連の調査団が現地へ派遣されるが残留放射能は人体に影響しないほどの極少量しか検出されなかった。

5月25日

国連は事態の収束を宣言。

それ以降、太平洋全域にて不可解な地震や土壌から放射能が検出され始める。当初は某国による水爆実験の影響だとされたが、それは終末の前兆だった。彼ら人類には恐るべき脅威がすぐ身近まで迫っていた……………

シン・ゴジラを観た勢いです。軍事や経済については全くの素人なので間違っていたらご指摘お願いします。

E
n
c
o
u
n
t
e
r

目
次

Encounter

4th / July / 2017 10:24 太平洋

夏の暑い日差しが照りつけ、どこまでも凧いだ海が広がる太平洋上を1機の航空機が飛んでいた。

「スクランブルかかったからとすつとんできたはいいが、何もいやしねえじゃねえか。」

コクピットに座った機長らしき男が言った。

「一帯をすべて探したはずですが…。」

後方のソナー員が困惑したような声で言った。

「逆合成開口レーダーを使っても見つけられませんでした。いったい…。」

「コイツ《P-3C対潜哨戒機》に乗って12年と3カ月、こんなことは初めてだ…な。」

機長の声からは不安や恐怖が感じられた。当然である。P-3Cは本来潜水艦を見つけるために作られた航空機でレーダーやソノブイ、赤外線暗視装置まで備えた正にオライオンという名に相応しい優れた哨戒機だからだ。その装備をフルで活用しても敵潜の発するノイズの一つすら拾えなかったのだ。潜水艦は速力が低いため絶対に搜索範囲内にいるはずなのだ。ソレが潜水艦ならば。

「仕方が無い。燃料も少ないし帰投しよう。」

機長は帰投するため無線で連絡をいれようとした。

そのとき、

「機長！ソナーに感！方位210、距離700、深度…10…！」
「!?目視で確認しろ！」

機長を含めクルー全員が焦っていた。上空を哨戒機が飛んでいるのに浮上するなど自殺行為に等しいからだ。普通はありえない。

「目標を視認！しかし…！」

目標を目視で確認したコパイの声は困惑していた。

「なんだ!?どうした!なにがいる!?!」

「コパイの顔は蒼白だった。

「目標は船舶ではない！」

その瞬間クルー全員が衝撃を受けた。

「船舶じゃないなんてことがあるか！ちゃんと確認しろ！」

「確認してますがあれはどう考えても船じゃありません！」

「コパイは怯えているのか半泣きになりながら反論した。

「もういい！貸せ！」

機長はコパイから双眼鏡を半ば奪い取るようにして受け取り、覗き込んだ。

「なんだ… あれは…。」

そこにはまるで漆黒の岩のような物体が浮かんでいた。否、泳いでいた。

まるで

「恐竜だ…。」

機長は感動とも畏怖ともとれるえも言われぬ感情に支配された。

基地に帰投した後、彼らはありのままを報告した。しかし、信じる者は誰一人いなかった。

後日、彼らは同じ海域を搜索したが発見どころか、手がかりさえも入手できなかった。

しかし、彼らの機体に搭載されていたカメラの映像により、ようやく謎の生物の存在が認められた。

彼らの発見が後に全世界を巻き込む大騒動になるなど、この時はまだ誰も知る由がなかった。